

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2192500060		
法人名	株式会社 下平		
事業所名	さくら悠輪苑		
所在地	岐阜県安八郡輪之内町四郷字新開288番地		
自己評価作成日	平成28年1月29日	評価結果市町村受理日	平成28年5月2日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.jp/21/index.php?action=kouhyou_detail_2015_022_kani=true&ji_gyosyoCd=2192500060-00&PrefCd=21&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 旅人とたいようの会		
所在地	岐阜県大垣市伝馬町110番地		
訪問調査日	平成28年3月24日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「自宅が1番」「家族と一緒にくらしたい」は当たり前の思いであり、その当たり前を前提に「それでもここできらしていこう」と思っていただけの環境を24時間365日どのスタッフでも提供できている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

家庭的な雰囲気を重視し、利用者個々の思いを尊重した介護を提供している。元気な利用者も多く隣接する大型スーパーマーケットに出かけたり、喫茶・美容院・野菜販売のホットステーションに出かけたりしており、日常的に住民と交流している。クラフト教室を事業所で毎月行い、住民も参加できるように開放している。認知症への理解も深まり、事業所に直接相談にみえる住民もあり、認知症カフェを開設予定にしている。開所後、まもなく1年を迎えるが、地域や行政から事業所に期待され増床につながっている。運営推進会議のメンバーも積極的な意見が多く、地域の財産として活用し、住民に馴染んだ事業所となるように努力している事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	日々の業務の中で、理念を念頭に、職員が同じ方向性を持ちながら、共有し実践できるように繋げている。	母体会社の運営方針に合わせた理念があり、実践できるように管理者は随時職員に声かけしている。母体会社の理念を掲示しているが、職員全員が理念の周知ができていない。	全職員で事業所に合わせた理念を話し合い、日々の介護で実践につなげていただきたい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の運動会、お祭り、文化祭、三世代交流会などに参加させてもらっている。区長にお願いして企業としてではなく、1件の世帯として地域に入っている。	住民と利用者が触れ合うホットステーションに出かけたり、クラフト教室を事業所で毎月行い、交流している。認知症への理解も徐々に深まり、事業所に直接相談にみえる住民もある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	職員の半数が地元である為地域の方から色々な相談をうけている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	現在2カ月に1度の開催となっている。毎回、輪之内町福祉課、地域包括、社協、区長、民生委員、ご家族代表と参加していたり、さまざまな意見を頂いています。	開設後、1年に満たず、事業所の実情報告と共に諸課題について意見を求めている。関係者から運営の意見も多くあり、地域でのつながり方の意見が出て、認知症カフェを開設する予定となった。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	福祉課や広域連合の担当者と連絡をとっている。運営推進会議では施設での活動等も報告している。	福祉課・広域連合・包括支援センターを含め、いつでも助言が得られる関係ができています。生活困難者の受け入れ・住民の困り事・増設施設の補助金申請の書類等も逐次担当者に相談している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関の施錠は夜間のみ防犯と利用者様の安全上やむえず施錠しているが早朝からは解除し日中施錠をすることはない。身体面では身体拘束マニュアルを職員は理解し行っている。今後は更に理解を深める為にも定期的に研修や勉強会を行っていききたい。	玄関は施錠せず利用者は元気な人も多く、職員の目が届かず外に出てしまう事もあるが、姿をそっと見守り迎えに行く時もある。利用者の思いを制止する「待って・だめ」等の言葉遣いにも注意している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待が行われないよう職員同士が言動に注意を払っている。今後定期的に研修や勉強会を行っていききたい。		

グループホーム さくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	後見制度を利用されている人がいない為一部の職員は知識はあるが全職員に対して後見制度について学ぶ機会を持つことができていない。今後勉強会等行っていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時には、時間をかけて話し合いをもって入居している。サービス内容や料金等について理解、納得していただけているようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者、家族がいつでも管理者や職員と本音で話ができる様な関係作りができています。	面会時に必ず声かけし意見や希望を聞いている。面会に来れない家族には、メールで利用者の様子を伝え、要望等を聞いている。家族の希望で座る場所への混乱があり、名前の表示を取り入れた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回のミーティング時に職員から意見などを聞く機会を設けている。そのつど、意見交流をしてスタッフが管理者に話しやすい雰囲気作りをしている。	毎日の業務内や申し送り時にも管理者は職員から意見を聞いている。メリハリをつけるために、業務時間内に利用者と職員と一緒に体操を取り入れ、行事やレクリエーションの計画は職員で話し合っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	一人ひとりの職員が、より働きやすい職場環境がつくれるように努めています。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修へ積極的に参加している。また、研修の案内を掲示し、希望者は参加出来るように配慮している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修先で他事業者の職員と交流を図ることが出来、刺激になっている。		

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所の事前面談に管理者とケアマネで出向き、直接本人の要望を聞いている。よりよい支援内容を一緒に考え、入居時のケアプランに反映するようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設見学に見えた時に現状の問題点をお聞きして今後の対応を一緒に考えている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用者、家族の思いや現状等を確認し、必要としているサービス支援を提案している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者とは家族だと思い日々接している。同じ目線に立って利用者の痛みが分かるよう心かけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族には、本人の趣味や生活歴などを教えてもらいながら、事業所で行える取り組みや家族に支援してほしい事を検討、提案をしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	個別での外出機会を設け、馴染みのスーパーや喫茶店に行くように心掛けています。	利用者の思いや希望をできるだけ尊重し、友人や兄弟の面会を家族に伝え実現している。職員と一緒に馴染みの商店に買い物に行ったり、家族の協力で自宅や行き慣れた商店に行く利用者もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員が利用者同士会話をしている時は、パイプ役となって良い関係作りができるよう努めている。		

グループホーム さくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院先には2週間」に一度のペースでお見舞いに行っていた。亡くなった後もご家族から「本当に入所させて良かった。感謝しています。」と言ってもらえた。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人、家族からの聞き取りやカンファレンス等でスタッフが話し合い、本人の立場に立って検討している。	利用者の表情や顔色等を見逃さず、その人にあわせた声かけをしている。入居時に家族から生活歴・暮らし方・楽しみ等をできるだけ聞いて、推測している。困難な場合は、意思表示しやすいよう具体的に聞いている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の面談や、入居後の家族来所時に聞き取りを行い把握に努める。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活、バイタル測定値、様子観察から把握に努めている。細かい変化を記録し申し送りを行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	面会時や電話でご本人の現状を伝えご家族の意向や本人の意向を聞いている。関係者間で話し合いをし、介護計画を作成している。	家族や利用者には事前に希望を聞き、医師の意見も取り入れ計画を立てている。ケアプラン評価表で、ケア目標毎に毎日チェックし、モニタリングの参考にしている。状態変化時は随時見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎朝9時の申し送りや連絡ノートを作り行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームとしての機能を最大限引き出した支援として取り組んでいる。		

グループホーム さくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	週に1回、輪之内社協が行っている、ホットステーション輪之内に行き喫茶を楽しみながら地域の方と会話を楽しんでいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月2回の往診を受けている。ご本人、御家族の希望があれば、今まで通院していた医療機関を利用している。	本人や家族の希望を聞いて、協力医又は入居前からのかかりつけ医に受診している。協力医は24時間対応が可能である。専門医に受診時は家族が付き添い、様子を口頭で伝え受診後も情報を聞いている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	常勤看護師がいる為そのつど連絡し対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院された方がまだみえないが今後そのような事があれば、病院関係者との情報交換や相談に努めていきたい。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	お見舞いに行った際にはNSから状況を聞き、退院後には必要な環境作りが出来るよう努めた。	事業所は看護師も常駐し、最期まで看ることができる旨の説明を契約時に行なっている。体調に合わせて、家族と随時話し合っている。開設より約1年で実績はないが、家族と最期が穏やかに過ごせるように、畳の部屋も用意してある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	まだこのような研修が出来ていない為、定期的に行えるよう努めていきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回防災訓練を実施しており内1回は消防署立会いのもと避難訓練や消火訓練等を行い助言を受け次回の訓練に役立てている。また消防設備の点検の際、設備の取扱い等の説明を受けている。	昨年の12月に事業所開設後、初めての避難訓練で通報・初期消火訓練を行なった。1回目でもあり、夜間想定訓練は実施しておらず、地域住民の参加はなかった。非常時の水・食料・医療品・衣料等を備蓄している。	夜間想定を含め年2回の避難訓練を実施していただきたい。様々な機会をつくり、地域住民にも参加してもらえるように努めていただきたい。

自己 部	項 目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	年長者としての尊敬の気持ちを忘れず、言葉かけ等には十分注意をするよう日々のケアを通して職員に促している。排泄時、入浴時等のプライバシーの尊重も図っている。	利用者の話や行動を否定しないように、その人の立場にたって、できることはやってもらっている。排泄時にドアを開けたままの時は、さりげなく閉め、入浴は1対1で行なうなどしてプライバシーの確保にも気を配っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で信頼関係の構築のためコミュニケーションを重視することで、職員が身近な相談相手となっている。レクリエーション、外出行事等では、コミュニケーションを行いながら自己決定が出来るように援助している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝の体操とおやつ前の体操は利用者全員で行っているが、それ以外利用者のペースで生活してもらっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎朝の服選びを職員と共に行い、本人が決定出来るように関わり、身だしなみの大切さを感じてもらっている。外出時にも、場所や天候等に合せ、職員と共に服を選び、お洒落の喜びを感じて頂けるよう努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の個々の能力を活かした、食事の準備、後片付けを職員と一緒にやっている。また、行事の時は利用者のリクエストに答えたメニューにするなど楽しみの時間になるよう努めている。	献立は利用者の希望を聞き、1週間程度を決めているが、当日に一部を変更することもある。食材の皮むき・ご飯付け・食器拭きなどを利用者と一緒にやっている。食事は会話をしながら楽しくとっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、水分量のチェックをしている。水分摂取を促したり、体調や口腔内の状態に応じ、お粥、刻みなどにして提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後は必ず口腔ケアを行っています。ご自分で上手くできない方に対しては、スタッフにて介助や確認をしています。		

グループホーム さくら悠輪苑

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を作り排尿、排便の確認や排泄パターンを把握している。タイミングを見計らいトイレへの声かけ、誘導をしている。	自分の意思と力でトイレ排泄ができる利用者が多く、それが継続できるよう見守っている。トイレを探す様子の人に、声掛けし誘導している。排泄チェック表で夜間の排泄パターンを把握し、安眠を妨げないようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分を多めに摂取して頂いたり食事や食物繊維の多めのものを取って頂いたり工夫をしている。状況に応じて主治医に相談して薬で対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴はいつでも入れるようにしている。ゆっくりと安心して入浴が出来る様に職員と1対1での入浴を行っている。入浴は週3日を目安に行っているが強制はしていない。	入浴したい時に入ってもらようようにしている。入浴を嫌がる利用者には無理強いせず、声掛けの工夫や時間を変えたり、職員を交代している。湯を使用ごとに入れ替えており、タオルを浴槽に入れて洗う人もいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中はなるべく活動的に生活が出来るよう支援しているが、一人一人の身体状況・生活習慣に合わせて介助をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報はカルテにはさまれておりいつでも確認が取れるようにしてある。服薬ミスの無いように服用時には名前や日付の再確認を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴や暮らし方・楽しみ・張り合い等を考慮しながら支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い時には、積極的に散歩へ出かけられるよう支援している。又、近所のスーパーでの買い物に付き合っていたり、喫茶店にも定期的に行っている。	散歩は職員が付き添い、利用者が行きたい時に自由に出かけている。近くの喫茶店やスーパーマーケットに行くことも日常的にある。ドライブを兼ねて、千代保稲荷・地域の祭・外食に出かけたり、町外の認知症カフェに行き気分転換することもある。	

グループホーム さくら悠輪苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人の意思を尊重して、財布を所持したり外出時に使える様に支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があればいつでも電話や手紙など外部と連絡がとれるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	暑すぎず、寒すぎないように心がけている。冬季は、加湿器を活用し家庭的な雰囲気と温かみを出す為コタツをおいている。	利用者はリビングルームに置いてあるやぐらごたつを囲み過ごすことが多い。こたつに足を突っ込んでTVを見たり、新聞を読んだり、話をしたりしてくつろいでいる。ベランダに花や野菜を栽培したり、洗濯物を干したりと家庭的な雰囲気にしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにソファやテレビを用意し、会話を楽しんだり、くつろげる共用空間作りをしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族にお願いして御家族様の写真などを持ってきていただき飾っている。できるだけ、自宅での生活感を継続していただけるよう支援している。	絨毯に布団を敷いたり、ベッド・タンス等をその人が使いやすいように配置している。家族の写真・観葉植物・時計・カレンダーなどの気に入ったものや使い慣れたものを持ち込み、自分らしい部屋となるようにしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居者様が主役となる支援を目指し、在宅でしていた事が出来るように、職員は見守り・思い出す手助けをしている。		